



バックナンバーや屋久島国有林における入林申請等は
こちらにあります
http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/



鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1

TEL0997-42-0331 FAX0997-42-0333



「屋久島憲法100周年記念シンポジウム」第4回準備委員会の 開催 (2月3日)

一般社団法人中辻創智社の助成を受けた「屋久島憲法100周年記念シンポジウム準備委員会(代表中島成久法政大学名誉教授)」主催の第4回会議が屋久島離島開発総合センターで開催されました。



第4回準備委員会の状況

今回は、昨年10月の第2回会議での中島氏の発表を受けての企画でした。1921年(大正10年)の「屋久島国有林経営の大綱」(屋久島憲法)によって約7,000haあった委託林は、昭和26年(薪炭)共用林と名称変更されたものの、その後の燃料革命などによって薪炭林としての需要が減り、チップ・パルプ材として伐採され、伐採跡地に昭和36年屋久島林業開発公社による杉の植林事業が始まりました。屋久島公社は平成11年鹿児島森林整備公社に合併、屋久島会計となり、今日に至っています。

約7,000haあった委託林は、公社林になっている部分を除いて共用林としては約1,200haしか残っていないのが現状です(第3回会議での森林管理署の西署長の報告)。

今回は町内20の共有林組合の中から永田地区、安房地区、楠川地区の共有林組合の実態が報告されました。永田では国有林下げ戻し裁判以前の明治中期に森林誤謬訂正願いという運動があり、その結果広大な民有林が確保されました。永田はその分共用林の利用が盛んではなく、他の組合との違いが鮮明になりました。安房共用林組合は平成11年の鹿児島森林整備公社への統合後、残った共用林の更新をしなかったのですが、残された共用林は崖地などの利用価値の低い森であることも更新をしなかった背景にあります。一方楠川地区の共用林の面積は小さいながら地元の水源林としての利用価値があるので残されたとのこと。フロアからは、瑕疵によって更新手続きをしなかったが、元の共用林を復活できないかなどの切実な訴えもありました。

事務局によりますと3月中旬に第5回目の準備委員会が開催される予定です。また、他の共有林組合の実態についてもさらに検討を続けていくとのこと。

事務局によりますと3月中旬に第5回目の準備委員会が開催される予定です。また、他の共有林組合の実態についてもさらに検討を続けていくとのこと。

車両通行規制がはじまります！

3月から、縄文杉荒川登山口車両乗り入れ規制が始まります。屋久島の自然環境や快適な利用環境を守るため、みなさまのご協力をお願いします。

屋久島には固有の動植物が数多く生息・生育しており、自然景観も豊かな島です。動植物の捕獲や採取、むやみに登山道以外の箇所に踏み入らないで下さい。

みんなで登山上のマナーとルールを守りましょう！

●●●●●●●●●● 屋久島主要箇所の2020年雨量データ ●●●●●●●●●●

観測場所	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
台風襲来回数								1	2	1			4
保全センター (標高 5m)	685#	221	215	90	227	951	572	205	742	168	92	109	4,274#
宮之浦林道 (標高 460m)	561	400	297	184	355	1,415	1,002	289	1,561	580	190	197	7,031
白谷雲水峡 (標高 630m)	676	366	427	145	516	1,442	1,208	548	1,544	820	347	231	8,270
白谷林道220支線 (標高 650m)	588	332	345	137	354	1,368	993	492	1,466	703	263	184	7,225
小杉谷 (標高 680m)	503	350	347	162	541	1,730	1,467	549	1,281	538	316	153	7,937
カンカケ岳 (標高 730m)	209	374	191	138	286	1,063	839	290	633	86	75	65	4,249
大川林道 (標高 1020m)	399	586	352	233	482	1,711	1,320	576	1,060	361	194	165	7,439
淀川登山口 (標高 1380m)	413	709	614	365	865	2,255	1,733	789	1,273	546	349	144	10,055
黒味岳 (標高 1800m)	229	350	220	141	427	1,474	980	334	831	193	177	65	5,421

上記の表は、屋久島に設置している11箇所の雨量計のうち、欠測等がない箇所の2020年雨量データを集計したものです。

※ 台風襲来回数は、南九州に接近した回数
 ※ 雨量 (mm)
 ※ #は期間中に欠測のあることを示す。

年平均降水量は、5,100mmであり、淀川登山口では10,000mmを超える雨量を記録し、5,000mm以下の3ヶ所の外は7,000mm以上の雨が降っています。

月別平均降水量は、平均200mm～1,700mmとなり、多い月では2,200mmを超える月もありました。台風接近に伴って、南から湿った雨雲が断続的に流れ込むことにより、屋久島の山岳部に大量の雨を降らしています。

※この雨量観測は気象業務法第6条1項1の研究のために行う気象の観測となっています。

屋久島世界遺産地域科学委員会・ヤクシカWG合同会議

(2月9日～10日)

令和2年度の第2回世界遺産地域科学委員会とヤクシカ・ワーキンググループ及び特定鳥獣保護管理検討委員会の会議が2日間にわたり開催されました。第1回に引き続き新型コロナの感染拡大防止のため東京、熊本市、鹿児島市などからリモートによる会議となり、屋久島町においては環境文化村センター及び当保全センターの会場で行われました。



ヤクシカWG・屋久島文化村センター会場

2月9日のヤクシカWG会議では、ヤクシカの生息状況とその行動範囲、令和2年度捕獲状況や被害防止対策、森林生態系の管理目標などについて、各機関から説明がありました。今後もWG委員と連携をはかりヤクシカの管理実施計画を進めていくことを確認しました。

また、2月10日の科学委員会では、令和2年度世界遺産地域モニタリング調査等の結果の報告及び高層湿原保全対策、山岳部利用のあり方検討などについて各機関から説明があり、今後もモニタリング調査を実施し保全対策に努めることとしています。

古に人が運んだ植物（第3回）

—— 誰が運んだ ヤクシマカワゴロモ ——

寺田 仁志（鹿児島大学 非常勤講師）

一湊川の溪流には世界でもここだけの極めてレアな植物が水中に生えています。カワゴケソウ科のヤクシマカワゴロモです。

カワゴケソウ科植物は熱帯地域の溪流植物といわれ、日本には南九州に6種が分布します。急激に増水し、激流に洗われる環境に適応するように茎や葉は痕跡程度に退化し、根は岩盤にぴったりと固着し葉緑体を持ちます。花びらはありませんが、水位の低い秋季から冬季に根から出て開花結実する特異な形態です（写真1）。生育には水量、水質、日照、流速が深く関わり、上層を森林で遮蔽された暗い場所、止水や緩流区間、水深の深い場所また、海水が混じる河口には分布しません。水量が少なく流速が遅くなり水質が悪くなるとアオミドロなどが発生し、生育が阻害されます。元々希少な上、水質悪化等により日本のカワゴケソウ科植物のすべての種が絶滅危惧植物に指定され、その保全が求められています。

鹿児島県は昭和29年に天然記念物指定し、国は、平成20年、28年に一湊川、志布志の安楽川、前川、宮崎県岩瀬川のカワゴケソウ科植物の生育地を天然記念物に指定し保護と活用を促しています。

日本の他地域が火砕流堆積物の溶結凝灰岩や溶岩上に生えるのとは異なり、一湊川では花崗岩の転石上に生えています。稚児見橋上流400m付近から天幸橋上流50mの区間で水深1m未満、流速30cm/秒以上あるところです。一湊川は他の生育地に比較すると桃源郷のようにきれいで、遠くから植物体がわかります（写真2、3）。流域の大部分が森林で自然林も多く、林床植生がフィルター的作用を果たしていることや地域の方々の環境を大事にする意識が高いためです。

さて、幼虫の時カワゴケソウ科の植物だけを食べるガがいます。カワゴケミズメイガです（写真4）。一湊川周辺で夜間に灯火採集をすると、時期によっては何匹も取れます。これまで大川の滝でも採集された記録もあります。一湊川だけでなく屋久島のほかの河川にもヤクシマカワゴロモは生えているのかもしれませんが、また、この植物について、花粉をめしべに運ぶ方法や種子を川の流れに逆らって上流に広げる方法もまだわかっていません。（溪流中の虫などを採って食べるカワガラスなどが広げると予想している人もいます。）

ヤクシマカワゴロモには誰が、いつ、その祖先を屋久島に熱帯地域から運んできたのかをはじめ不思議や疑問がいっぱいあります。本種の発見は昭和8年に一湊中学校の名越鉄夫先生が川でエビ取りをしたことがきっかけであったように、川で遊んで自然の姿や仕組みを考えると思わぬ発見・解決につながることでしょう。（おわり）



写真1. 根から花が出る



写真2. 遠くからでもコロニーがわかる



写真3. 丸いコロニーをつくる



写真4. カワゴケミズメイガ
（福田輝彦氏撮影）

屋久島生態系モニタリング



縄文杉前面の下層植生（平成30年度）

縄文杉植生調査プロット(面積計52.5㎡)に生育している植生は、多くが天然下種更新による自然進入種であり、一部にH13年度及び16年度に植栽された低木及びシダ類の植株である。

植物種(木本・草本・シダ類)の出現種数、木本の本数及び低木・草本層の植被率は、ヤクシカによる食害で減少(H14年度から19年度)。H21年2～3月に設置された植生保護柵の成果によりH24年度以降増加している。

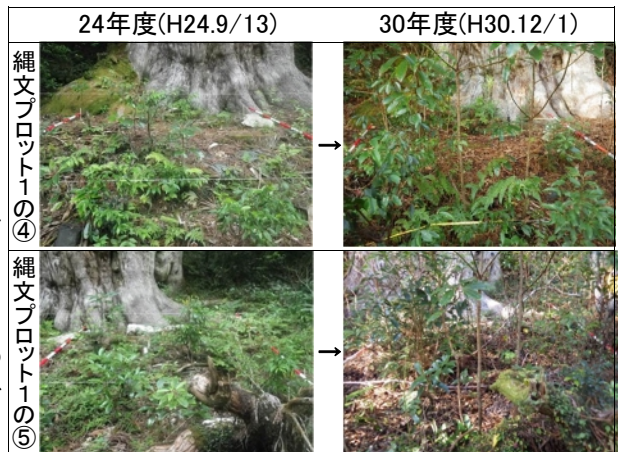
木本の本数は、H30年度では460本/52.5㎡と減少、これは低木が成長し、低木間の光獲得競争が激しくなってきたことが考えられる。

蘚苔類の被覆率は、僅かに増加、現在では6%と減少しているが、これは草本層・低木層の植被率が増加したことによる可能性が高い。草本層は、常緑で面積の広い葉を持つユズリハが優占しているため、林床は以前より一層暗いが、ユズリハを中心とした草本層の木本が低木層や亜高木層に移行すると、林床は光が届くようになり、再び蘚苔類の被覆率が増加に転じることが考えられる。

地表面の裸地率は、回復しつつある。ヤクシカの影響が排除されたことにより下層植生が繁茂し、地表が植生や落葉落枝で覆われ、表面侵食が減少している。

低木層の優占種はH14年度から現在に至るまでハイノキだが、草本層の優占種は、H14年度とH19年度はコバノイシカグマ(シダ類)で、H24年度はフタリスズカ(草本)となり、現在はユズリハ(木本)となっている。これらは、いずれもヤクシカの忌避植物である。

特筆すべき点としてシダ植物の種数の増加が挙げられる。種の構成を見ると、H24年度に確認されたタチク라마ゴケ、ハイホラゴケは見られなかったが、H30年度の調査では13種もの新規確認種を記録。中でもイノデ、オオキジノオ、コスギイタチシダ、ゼンマイ、タイワンアリスンイヌワラビ、タカサゴキジノオ、タカサゴシダ、ツクシイヌワラビ、ホウライイヌワラビが出現し増加しつつある。これらの種の多くはヤクシカが好んで食する種であり、明らかにヤクシカの食害対策である植生保護柵の成果である。



自然休養林情報

ヤクスギランド⑥ やくすぎの森コース その2

ヤクスギランドのやくすぎの森コースは、標高約1000mから1080m、延長約3km、所要時間約150分のコースです。樹齢1000年以上の屋久杉をはじめ、江戸時代の伐採後に回復した美しい小杉の森をじっくり堪能することができます。ここでは、「天柱(てんちゅう)杉」から先を紹介していきます。

ヤクスギランド内の主な屋久杉の中で、一番背が高い「天柱杉」から約300m進むと、「母子(ははこ)杉」に到着します。「母子杉」は、2本が根際で合体した屋久杉です。大きい方が母で、推定樹齢は2600年ですが、すでに枯死しているようです。そんな母を、下側の子にあたる若々しい屋久杉が支えているような姿をしています。

次に鑑賞できる屋久杉は、推定樹齢1100年の「三根(みつね)杉」です。この杉は、折れた屋久杉の上に更新した倒木更新。高い株を抱え込んでいるため、根元が大きくふくれあがっており、屋久杉の世代交代の仕組みがよくわかる例です。

また、やくすぎの森コースは、太忠(たちゅう)岳へ至る登山道の分岐点にもなっており、天文(てんもん)の森を経て天柱石がそびえ立つ太忠岳へと続いています。

